F/T12
FESTIVAL/TOKYO

東京文化発信プロジェクト

イェリネク三作連続上演

光のない II / Port B

作：エルフリーデ・イェリネク　構成・演出：高山 明

Jelinek Series: Kein Licht II / Port B

Text: Elfriede Jelinek　Concept, Direction: Akira Takayama

11/10（Sat）- 11/24（Sat）

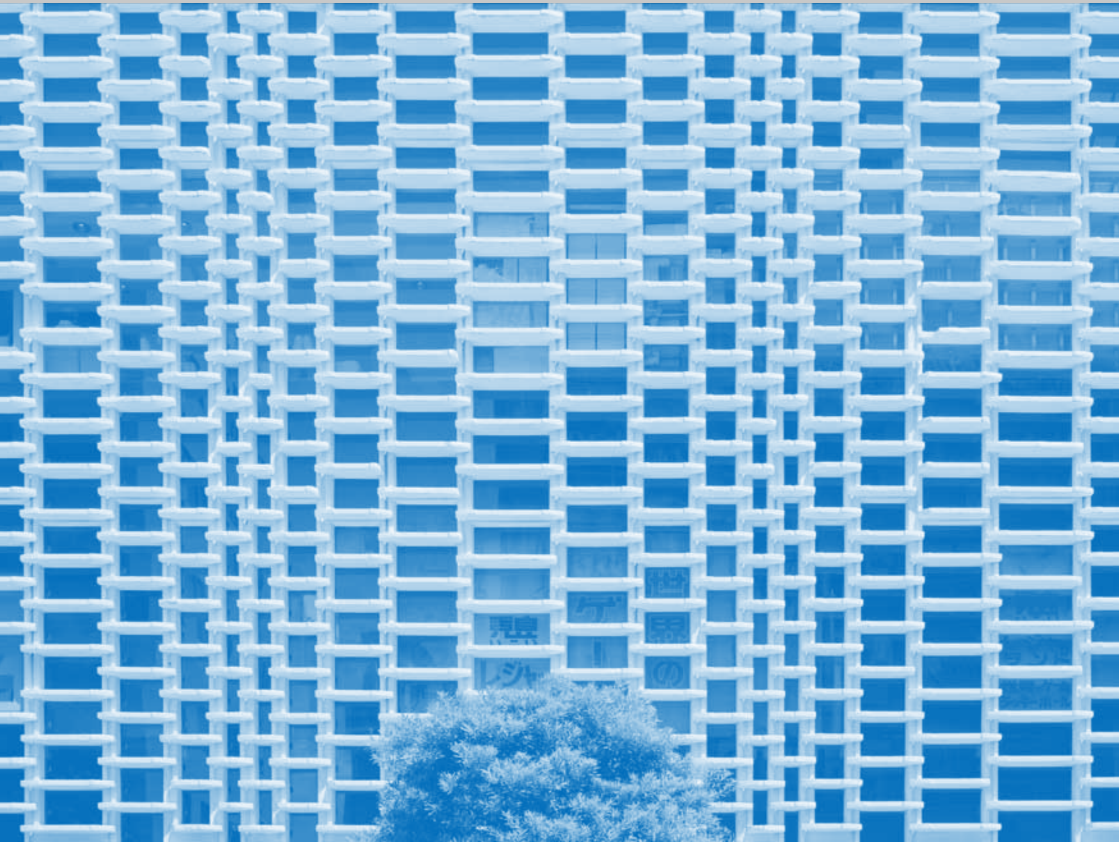
新橋駅周辺

Shinbashi Station Area

TOKYO 2020 CANDIDATE CITY

2020年オリンピック・パラリンピックを日本で！

© Shinichi Tsuchiya



対談：高山明（演出家）×土屋紳一（写真家）

〈エピローグ？〉とは何か。イェリネク／翻訳／写真

3.11後の福島を撮った報道写真のイメージを、東京の具体的な空間に再構成する本作。イェリネクのテキストと、〈写真〉というメディアの特性、手法を繋げるうえで重要な役割を担った、写真家・土屋紳一と、高山明が、その思考の過程を語る。

高山　イェリネクのテキストは、普通の意味で〈分かる〉のとは違うものです。福島の状況を本当の意味で分かることがないように、僕はこの戯曲が分からない。でも、前作の『国民投票プロジェクト』にゲストで来てくれた赤坂憲雄さんは、「震災後、〈分かる〉ということの価値がこんなに暴落してしまった時代はない」と言われた。これは本当に身に染みる言葉でした。

　震災後、僕は新聞やインターネット上に掲載されているあらゆる映像や写真をパッチワークし、自分なりに「こんな感じだろう」と、ある種、タカをくくって混乱しないでいられる場をつくり出してきたように思います。でも、この『光のないII』は、そうやって僕が作ってきた福島のイメージを思いっきりぶち壊してしまった。すごい作家だと思います。そして同時にこの、イェリネクという異物を、今までやってきた演劇の手法の中で飼いならすことは許されないとも感じました。だから今回土屋さんに声をおかけしたのは、〈写真〉について考える機会を持ちたかったからだけでなく、僕には分からないものを作品に取り込むことで、方法的にかき回されたいという意識が働いたからだと思います。

土屋　僕の場合はこの戯曲についても、演劇についても分かっていないことが多いんです。でも、それも含めて話をして、高山さんの考えていることを少しずらして見るような、とりにくいボールを投げる役割を担ってきたつもりです。震災以後は、分からない世界がすごく近くなりましたね。たとえば「シーベルト」なんて言葉は聞いたこともなかったけど、日常的に使われるようになったり。写真で言えば、そこに映ったものを〈信じる／信じない〉という価値観から、〈受け入れるか／受け入れないか〉という判断を迫られるところにまで、見る側の意識が一気に進んだ。そういう意味でも、僕たちが互いの背景を理解しないまま、この企画を始めたのはいいことだったかもしれません。それは、バラバラに登場する〈見立て〉のセットを前に、背景の情報をあまり考えすぎず、まず、受け入れるという、この作品の見方にもつながっている気がしますから。

◇

高山　今回の作品は〈翻訳〉ということにも大きな影響を受けています。翻訳者の林立騎さんは、イェリネクのテキストをいわゆる〈自然な日本語〉にはしていません。いわば、ドイツ語を介しいびつになった日本語。でも、それこそが僕の思考やイメージ、あるいは日本語の概念を大きく揺さぶったんです。土屋さんも以前、イェリネクの原文をGoogleの自動翻訳にかけたものをスタッフみんなに送ってくれました。その日本語も面白かった。どうしてあれをやろうと思ったんですか。

土屋　原文を読んでみたら、なんだか不思議な、手で触れているような感覚があったんです。これはどうやって書かれたんだろうと考えて……日本語の情報を誰かが訳して渡してたりもしないだろうし、ひょっとしたら自動翻訳してるんじゃないかと思いついたんです。そのせいでどこかしら日本語の要素が文章の中に残って、僕に伝わって

きてるのかもしれないと。試しにドイツ語から日本語に逆に自動翻訳をかけたら、これも面白い文章でうまいこと読めるんですよね。どうしてこんなことが起こるのか。これはもしかしたら今回の作品の中でも意味を持つかもしれないと思ったんです。

高山　僕らの日常語とはフィットしない言語でやるということはすごく大事なことです。林さんの翻訳も逐語的な、自動翻訳みたいな響きを引き継いでいるところがあります。この戯曲はギリシャ悲劇の『アンティゴネー』をモチーフにしているんですが、イェリネクはヘルダーリン訳のドイツ語版を使っています。これもいったんギリシャ語を経て変換されたドイツ語の、いびつさが特徴的な翻訳です。そうして考えると、僕たちがこの作品でやっていることも、それとよく似た行為だと思います。報道写真に写ったイメージを、三次元の具体的な空間に自動翻訳する。福島のある風景を東京のなんの文脈も共有していない空間に再構成した結果は変に決まってます。でも、その不協和音の中にこそ、自分が福島にいないこと、今東京にいるということ、その距離がはっきりみえてくるんじゃないか。演劇を作る時にも観る時にも、感情移入はつきものですが、でも今は、それよりも、僕らの前に現実にある距離を測り、感じることの方が重要なんじゃないのかな。

◇

土屋　いわゆるプロの写真とは、撮ってる人間を感じさせない、見る人がそこに立っているように感じられる写真を指すと思われがちです。でも、僕はそこにも疑いを持っていて。ただでさえ携帯電話で、誰もが写真を使った表現ができる時代になったところに、今回の震災があって、津波の襲う瞬間など、報道では撮れなかったものが出てきてしまった。そういった面でも、今回報道写真を使うことは重要かなと思います。ツアーパフォーマンスとフォトジャーナリストの関係の中で写真そのものを問い直すこともできる。

高山　ツーリストが撮る写真と、フォトジャーナリストが撮る写真は、どう違うんですか。

土屋　ツーリストは基本的には、自分の思い出のために撮っている。忘れたくないから、思い出すために写真を撮るんです。フォトジャーナリストは、会ったことない人、見たことのない場面を、不特定多数の人に届けるために撮る。だけど、今は誰もがフォトジャーナリストになれちゃうところがあるから、結果としてただあやふやにシャッターを押すことが増えてきている。

高山　今回のツアーのお客さんは、ツーリストなんだけど、フォトジャーナリスト的な視点でも部屋の中の〈福島〉を見るのかもしれない。またそこから出た後も、同じように東京の景色を眺めるのかもしれませんね。それと今回土屋さんと議論して面白いなと思ったのは、報道写真にしろ観光の写真にしろ、写真を撮った人はその中にはいない、常に外側にいるということです。この作品では写真のフレームは3次元の空間にまで拡張されますから、観客はいわば、福島の、目には見えないけれど、放射能が充満しているような写真の中に入るという経験をする。そして実際の報道写真と目の前の状況を見比べるわけです。また、その環境の中でイェリネクのテキストを聴くということも重要だと思います。

土屋　改めて見てみると、福島の報道写真にはやっぱり、放射能を撮ろうとしている感じがありますよね。もちろんそれは写るはずもないんです

けど……。

高山　客観的な事実のように見える報道写真にも、写真家の意図や方法は入っている。僕はそれをこそ、今回のセットの中で実現したいなと思っています。今回選んだ写真の中には、鏡越しの自分を撮っているものがありましたね。それこそ、ツーリストとジャーナリストの境界が揺らいでしまっているような……。

土屋　カメラマンで、そこにいる自分の写真を撮り、不特定多数の人に見せるっていうのはなかなかないことです。イェリネクのホームページの『光のないII』のページを見ると、人間が消え、動物たちだけが残った福島の写真が載っています。これが結構重要なヒントかなと僕は思って。だから、もしかしたらあの鏡越しの写真は、残された動物たちと同じ気持ちになって撮られたものなのかもしれません。

高山　ウィーンの郊外にツベンテンドルフ原発という、一度も使われないまま、国民投票で廃炉になった発電所があるんです。そこに行くと「未来のエネルギー」と書かれた垂れ幕がかかったままで、時間が止まっちゃって、未来もフリーズしたような奇妙な感覚に捕らわれる。あの感じはもしかしたら、福島の避難区域の、蒲団がはがれたままの、突然誰もいなくなってしまった部屋と似ているんじゃないかと想像します。僕が『光のないII』を読んで、いちばん表現したい、掴みたいと思ったのは、そういう、時間が失調してしまうような感覚です。それは、原発が欲しいと願って、それが実現して、でも津波で壊れてしまって、今度は原発を止めたいっていう別の願いを持つことになって……と、時間が錯綜して振り出しに戻ったかと思えば、全く別の場所に出ていたりするような感覚でもあります。イェリネクがこの戯曲を発表した時のタイトルは『エピローグ？』です。それは〈福島／フクシマ〉が、もはや言葉だけのものとして、終結させられつつあることへの批判でもありますが、それ以後全く違う時間が始まったという意味でもあるんじゃないかな。またその時間の問題と〈写真〉というメディアは、やっぱり根本的なところで通じていると思います。自分でも最初はよく分かってなかったですけど、やっぱり写真で大丈夫だったんじゃないかなと。

（2012年10月15日／構成：鈴木理映子）

高山明：演出家

1969年生まれ。2002年ユニットPort B（ポルト・ビー）を結成。440名もの中学生へのインタビューDVDを搭載したキャラバンカーで東京都内および福島県内を巡回したF/T11の『Referendum-国民投票プロジェクト』は、震災後の日本における貴重な声を収集したアーカイブとして反響を呼んだほか、都市空間の中に任意の「避難所」を設定し、インターネットを通じて観客を都市の現実へと接続するF/T10『完全避難マニュアル 東京版』でも話題をさらった。一方、F/T09秋で発表した『個室都市 東京』は2011年の「ウィーン芸術週間」に招聘され、ドイツ語圏の批評誌でも高い評価を得た。都市や社会に存在する記憶や風景、メディアなどを引用し再構成しながら作品化する手法は、演劇を現実社会に接続し、「来るべきもの」としての現代演劇の可能性を提示する。その試みは、国内外で注目を集めている。

土屋紳一：写真家

1972年生まれ。インターネットの黎明期から、写真装置の構造、写真の社会的影響などに着目したメディアアート作品を制作。デジタルカメラの台頭と同時にドイツに活動を移し、デジタル化が進む中、どのように向き合うべきかを問う写真作品に取り組む。2006年、トーマス・ルフから日本人唯一のマイスターシューラー（ドイツ国内で芸術家として取得できる最高の資格）の称号を得る。日本国内でも「サイトグラフィックス展」2005、「写真ゲーム展」2008（共に川崎市民ミュージアム）にて作品を発表。活動の場を日本に戻すことを決めてほどなく、東日本大震災が起こる。現在は、誰もがジャーナリストになれる可能性を持ち、カメラが未来に影響を与える装置でもあることが一般化したことを踏まえ、過去の時間軸に捕われない、時間、空間を自由に設定できる写真の鑑賞方法を探究する作品を制作している。

エルフリーデ・イェリネク、言葉と政治、現代演劇

林立騎(翻訳者)

かつてあるインタビューでみずからの芸術に対する姿勢を問われたイェリネクは、「政治的な内容にとどまりつつ、言語的な実験を続けたい」と述べた。たんなる政治的作家でも実験的作家でもなく、それらを両立させたいというのである。それはおそらく、現代において「政治的な内容」が「言語的な実験」を必要としているという確信に基づいている。

20世紀ドイツの法学者カール・シュミットは、政治とは「友」と「敵」を分けることだと定義した。その定義は今なお生き延びている。賛成か反対か、支持か不支持か、存続か撤廃か。「友か敵か」のバリエーションをわたしたちは日々目にしている。立場を鮮明にすることは、「わたし」や「わたしたち」にアイデンティティを与え、安定を生む。しかし他方で、一部だけ反対、条件付きで賛成、今は賛成とも反対とも言えない、等々の割り切れない、分け切れないものを排除しかねない。決めきれないまま居心地の悪い思いを抱えつづけることは難しく、「今、ここ」での決断を迫るような「空気」が、あたりを満たしていないだろうか。

「政治的」で「挑発的」な作家として知られるイェリネクだが、彼女の政治性とはそうした党派性のことではない。むしろイェリネクが「政治的な内容」に対して持ち込むのは、決めきれない居心地の悪さ、安定を許さない絶えざる違和感である。だがそれはいかに実現されるのか。

第一に、複数の意味やイメージを同時的にもつ言葉によって。東日本大震災と福島の原発事故をきっかけに執筆された『光のない。』において、そのタイトルは希望が失われた状況を示すと同時に、啓蒙の「光」が文明を進歩させた果ての光景として原発事故を捉える。つまり「光」はその肯定的な側面と否定的な側面を同時に明らかにする。そのときわたしたちは「光」を「友」とも「敵」とも言えない。「友か敵か」の思考が複雑な現実を単純化して提示するのだとすれば、イェリネクはむしろ現実の複雑性が極まるようなポイントを見つけ出す。イェリネクは、さまざまな党派性を同時に包む言葉を見つけ出すことで、より根底的な問題(「光」とはなにか、これ以上の「光」は必要なのか、「光」のなさにも価値はないか、等々)を浮かび上がらせる。それは政治の現場では行われ難い実践である。だからこそ彼女は「政治的な内容」を「言語的な実験」に晒すのだ。

そして第二に、「今、ここ」の問題を敢えてまったく別の時代や文化と結びつけることによって。東日本大震災から一年と一日が経った2012年3月12日、イェリネクは自身のHPで新作『光のないII(エピローグ?)』を発表した。これはやはり福島の原発事故や放射性物質の問題を扱う作品だが、同時に約2500年前に生まれた最も有名なギリシャ悲劇、ソフォクレスの『アンティゴネー』(ヘルダーリンによるドイツ語訳)を引用している。両者はもちろん直接に関係しない。だが過去を「客人」として招き、「今、ここ」を敢えて中断し、断片化し、複数化することで、イェリネクは歴史を、あるいはわたしたちの現在を、「エ

ピローグ」とともに連続性と安定性の中へ沈められることから救済するのである。

そもそもわたしたちが直面している現実は、「今、ここ」だけで考えても、「友か敵か」だけで分けても、もはや生産的に展開しないのではないか。演出家ヨッシ・ヴィーラーは、イェリネクのテクストでは「人物が語るのではなく、文明、文化、現代の総体が語っている」と述べている。それはシュミットとは別のかたちで現代の政治を問い直す言葉なのである。

人物や時代、場所の指定がほとんどなく、無数の意味やイメージが襞のように折り畳まれたイェリネクのテクストは、演出次第でさまざまに上演できる。ポストドラマ演劇と呼ばれる、もはや戯曲の再現を至上命題としない現代演劇にふさわしく、新作が書かれるたびにドイツ語圏の大劇場で話題になる。

ほとんど散文詩に近いような作品を敢えて「演劇テクスト」として発表することには明確な意図があるだろう。すなわち、言葉が声になること、そして言葉が別の誰かによって咀嚼され、上演という別のかたちへ変わることをイェリネクは求め、そうなるべきものを書いている。上演には、イェリネクが執筆の出発点とした政治的出来事をさらに挑発的に示すものもあれば、ヨッシ・ヴィーラーのように哲学的な側面を声として響かせるものもあるし、パフォーマンスに近いものもある。今回のF/T12は、三浦基による『光のない。』の舞台上演、高山明による『光のないⅡ』の野外ツアー上演、さらにドイツからヨッシ・ヴィーラーの『レヒニッツ』客演と、エルフリーデ・イェリネクのテクストに対する複数の「出会い」が一同に会する貴重な機会である。イェリネクのテクストのさまざまな上演は、現代演劇の政治性と実験性を、また現代演劇の言葉が、そして上演がいかに現代と対峙できるかを、わたしたちに明確に示すだろう。

エルフリーデ・イェリネク：詩人、小説家、劇作家

1946年オーストリア生まれ。ウィーン大学で演劇学と美術史を学ぶ。主な作品に、ベストセラーとなった小説『したい気分』『欲望』戯曲『ブルク劇場』『トーテンアウベルク』『雲。家。』『杖、竿、棒』などがある。ビュヒナー賞等の数々の演劇賞のほか、ドイツ語圏の最も重要な戯曲賞「ミュールハイム戯曲賞」を4回（02, 04, 09, 11年）受賞している。83年の小説『ピアニスト』は2001年に映画化され、その年のカンヌ映画祭で三部門受賞して話題を集めた。04年「豊かな音楽性を持つ多声的な表現で描いた小説や戯曲によって、社会の陳腐さや抑圧が生む不条理を暴いた」として、ノーベル文学賞を受賞。邦訳されている小説や戯曲も多く、近年ではフェスティバル/トーキョー09春にて『雲。家。』が上演されている。

©Hilde Zemann

作：エルフリーデ・イェリネク
翻訳：林 立騎

構成・演出：高山 明
写真：土屋紳一
舞台監督：清水義幸（カフンタ）
装置：江連亜花里（カフンタ）
装置アシスタント：森川存子
衣裳：有島由生（カフンタ）
技術：井上達夫
ラジオ：毛原大樹
ポストカード編集：深澤晃平
デザイン：アジール
記録写真：蓮沼昌宏
演出助手：坂田ゆかり、的場真唯
プロジェクトアドバイザー：猪股 剛

声の出演：いわき総合高校演劇部
（青木愛、飯島もも、沖崎美菜、片寄真亜也、鎌田彩音、桜井智恵理、
鈴木ゆうか、田中涼、千色和希、新妻宏恵、西田藍、原田麻穂、松本芽生、
屋代七海、渡辺真衣、渡部若菜）

協力：株式会社 太一、株式会社ダク・エンタープライズ、
神山産業株式会社、エクセラマネジメント株式会社、
石井路子（いわき総合高校演劇部顧問）
特別協力：ニュー新橋ビル管理組合、ニュー新橋ビル商店連合会

F/Tスタッフ
プログラム・ディレクター / ドラマトゥルク：相馬千秋
制作統括：武田知也、小島寛大
制作：藤井さゆり、田中沙季

F/Tクルー：箭内聖司、青島美和、川口茜、寺本奈津美、金セロム、
一ノ瀬貴志

製作：フェスティバル / トーキョー、Port B
主催：フェスティバル / トーキョー

Text : Elfriede Jelinek
Translation: Tatsuki Hayashi

Concept, Direction: Akira Takayama
Photography: Shinichi Tsuchiya
Stage Manager: Yoshiyuki Shimizu (Kafunta)
Set Design: Akari Ezure (Kafunta)
Set Design Assistant: Nobuko Morikawa
Costumes: Yuu Arishima (Kafunta)
Technical Manager: Tatsuo Inoue
Radio: Hiroki Kehara
Postcards: Kohei Fukazawa
Design: ASYL
Photographic Documenting: Masahiro Hasanuma
Direction Assistants: Yukari Sakata, Mai Matoba
Project Adviser: Tsuyoshi Inomata

Voice Cast : Iwaki Sogo High School Theatre Club (Fukushima)
(Mana Aoki, Momo Iijima, Mina Okizaki, Maya Katayose, Ayane Kamata,
Chieri Sakurai, Yuka Suzuki, Ryo Tanaka, Kazuki Chiro, Hiroe Nitsuma, Ai Nishida,
Maho Harada, Mei Matsumoto, Nanami Yashiro, Mai Watanabe, Wakana Watabe)

Co-operation from Taichi Co., Ltd., Daku Group, Kamiyama Co., Ltd.,
Excella Management Co., Ltd., Michiko Ishii (Teacher of Iwaki Sogo High School Theatre Club [Fukushima])
Special Co-operation from New Shinbashi Building Management Association,
New Shinbashi Building Shops Association

Festival/Tokyo Staff
Program Director/Dramaturg: Chiaki Soma
Production Manager: Tomoya Takeda, Hirotomo Kojima
Production Co-ordination: Sayuri Fujii, Saki Tanaka

F/T Crew: Seiji Yanai, Miwa Aoshima, Akane Kawaguchi, Natsumi Teramoto,
Saerom Kim, Takashi Ichinose

Produced by Festival/Tokyo, Port B
Presented by Festival/Tokyo

フェスティバル/トーキョー組織委員
Festival/Tokyo Organization Committee

天児牛大	振付家、演出家
荻田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多惠子	社団法人国際演劇協会（ITI/UNESCO）日本センター会長
蜷川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長

（五十音順）

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hitoshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuhara	Honorary Chairman,Shiseido Co.,Ltd.

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会
東京都、豊島区、
東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、
公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee
Tokyo Metropolitan Government, Toshima city, Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, Arts Network Japan(NPO-ANJ)

共催：社団法人国際演劇協会（ITI/UNESCO）日本センター

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

Supported by Asahi Group Arts Foundation

後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO

特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、サンシャインシティプリンスホテル、
ホテル メトロポリタン、ホテル グランドシティ、チャコット株式会社、株式会社白水社

Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, Sunshine City Prince Hotel, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Chacott Co., Ltd., Hakusuisha Publishing Co., Ltd.

協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会

In co-operation with The Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association

宣伝協力：株式会社ポスターハリス・カンパニー、
有限会社ネビュラエクストラサポート（公募プログラム）

PR support: Poster Hari's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)

メディアパートナー：J-WAVE 81.3 FM、新潮、ART iT、CINRA.NET

Media Partners: J-WAVE 81.3 FM, SHINCHO, ART iT, CINRA.NET

認定：公益社団法人企業メセナ協議会

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

平成24年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2012

会期：平成24年（2012年）10月27日（土）〜11月25日（日）

フェスティバル/トーキョー実行委員会
Festival/Tokyo Executive Committee

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末昌弘	豊島区文化商工部長
委員	八巻規子	豊島区文化商工部文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事/事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 代表
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登（骨董通り法律事務所）	

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Arts Network Japan Director
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshisue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members: Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuike, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
Executive Committee Office

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局長補佐	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、椙山由香、戸田史子、藤井さゆり
メディア戦略	松本花音
プログラム・リサーチ	クラウトハイム・ウルリケ
アジア事業コーディネート	小山ひとみ、李丞孝
票券管理	長原理江、宍戸円
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
総務	葦原円花、一色壽好
経理	堤久美子
制作アシスタント	小野塚央、砂川史織、田中沙季、田野入涼子、中山亜以
メディア戦略補佐	冠那菜奈
アジア事業コーディネート補佐	吉岡真衣子
インターン	伊藤芽依、小林弘樹、田端俊也、船橋史、吉崎香央里
技術監督	寅川英司
技術監督アシスタント	河野千鶴
照明コーディネート	佐々木真喜子（株式会社ファクター）
音響コーディネート	相川晶（有限会社サウンドウィーズ）
アートディレクション＋デザイン	アジール（佐藤直樹＋中澤耕平＋谷陽子＋徳永明子＋菊池昌隆）
ウェブサイト	濱田真一＋田中裕也（株式会社ロフトワーク）
パブリシティ	平昌子、望月章宏
海外広報・翻訳	アンドリューズ・ウィリアム
物販	渡辺淳
編集・執筆	鈴木理映子
編集・執筆（「TOKYO/SCENE」）	影山裕樹

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasuike
Assistant Administrative Director: Hirotomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators: Chika Kawai, Orie Kiyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Fumiko Toda, Sayuri Fujii
Media Strategy: Kanon Matsumoto
Program Research: Ulrike Krautheim
Asia Projects Co-ordinators: Hitomi Oyama, Seunghyo Lee
Ticket Administration: Rie Nagahara,Tsubura Shishido
Ticket Office: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Isshiki
Accounting: Kumiko Tsutsumi
Assistant Production Co-ordinators: Chika Onozuka, Shiori Sunagawa, Saki Tanaka, Suzuko Tanoiri, Ai Nakayama
Assistant Media Strategy: Nanana Kanmuri
Assistant Asia Projects Co-ordinator: Maiko Yoshioka
Trainees: Mei Ito, Hiroki Kobayashi, Toshiya Tabata, Fumi Funahashi, Kaori Yoshizaki

Technical Director: Eiji Torakawa
Assistant Technical Director: Chizuru Kono
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction+Design: Asyl (Naoki Sato + Kohei Nakazawa + Yoko Tani + Akiko Tokunaga + Masataka Kikuchi)
Website: Shinichi Hamada+Yuya Tanaka (loftwork Inc.)
Public Relations: Masako Taira, Akihiro Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki
Editor/Writer (TOKYO/SCENE): Yuki Kageyama

F/Tクルー: 会津麻美 , 青島美和 , 安達 彩 , 石引康子 , 一ノ瀬貴志 , 岩城泰斗 , 上杉康政 , 宇都宮千陽 , 内海ちさき , 遠藤乃利子 , 大泉尚子 , 大賀啓子 , 大道愛香 , 岡崎由子 , 緒方彩乃 , 岡本光代 , 岡本佳子 , 尾澤弥生 , 小野千尋 , 加藤真帆 , 鹿子木直美 , 金子穣為 , 川口 茜 , 木口七海 , 木下玉美 , 金セロム , 許 智龍 , 桐谷佳美 , 黒沢友美 , 小堺寛子 , 齊藤 望 , 斎藤絵里佳 , 崎濱恵梨 , 佐藤友香里 , 佐藤杏子 , 霜鳥桃子 , 柴田知子 , 鈴木智香子 , 関島弥生 , 高橋悠祐 , 田中有希 , 寺本奈津美 , 照沼静香 , 陶 旭茹 , 永井彩子 , 中村直樹 , 中村みなみ , 中山由紀 , 西岡宇行 , 能戸みな美 , 畑瀬富葵 , 初村和美 , 花田雅美 , 早川春菜 , 林原 栞 , 人見麻美 , 廣瀬加乃 , 福原麻梨子 , 福村 舞 , 藤原顕太 , 船川結菜 , 増渕 圭 , 松嶋瑠奈 , 松田早絵 , 松本雄哉 , 丸山未来 , 三鶴泰正 , 閔 慧玟 , 矢島 絢 , 箭内聖司 , 山口侑紀 , 山室木園 , 山分将司 , 弓野亜希 , 吉田由貴 , 米谷今日子 , 渡辺 更

F/T Crew: Mami Aizu, Miwa Aoshima,Aya Adachi,Yasuko Ishibiki, Takashi Ichinose, Taito Iwaki, Yasumasa Uesugi, Chiaki Utsunomiya, Chisaki Utsumi, Noriko Endo, Oizumi Naoko, Keiko Oga, Aika Omichi, Yuko Okazaki, Ayano Ogata, Mitsuyo Okamoto, Yoshiko Okamoto, Yayoi Ozawa, Chihiro Ono, Maho Kato, Naomi Kanakogi, Joey Kaneko, Akane Kawaguchi, Nanami Kiguchi, Tamami Kinoshita, Saerom Kim, Chiryu Kyo, Yoshimi Kiritani, Tomomi Kurosawa, Hiroko Kozakai, Nozomi Saito, Erika Saito, Eri Sakihama, Yukari Sato, Kyoko Sato, Momoko Shimotori, Tomoko Shibata, Chikako Suzuki, Yayoi Sekijima, Yusuke Takahashi, Yuki Tanaka, Natsumi Teramoto, Shizuka Terunuma, Xuru Tao, Sayako Nagai, Naoki Nakamura, Minami Nakamura, Yuki Nakayama, Takayuki Nishioka, Minami Noto, Fuki Hatase, Kazumi Hatsumura, Masami Hanada, Haruna Hayakawa, Shiori Hayashibara, Mami Hitomi, Kano Hirose, Mariko Fukuhara, Mai Fukumura, Kenta Fujiwara, Yuna Funakawa, Kei Masubuchi, Runa Matsushima, Sae Matsuda, Yuya Matsumoto, Mirai Maruyama, Yasumasa Mitsuru, Hyemin Min, Aya Yajima, Seiji Yanai, Yuki Yamaguchi, Kisono Yamamuro, Masashi Yamawake, Aki Yumino, Yuki Yoshida, Kyoko Yonetani, Sara Watanabe

編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会
アートディレクション＋デザイン：佐藤直樹＋中澤耕平（ASYL）
オペレーション：小林 剛
印刷：アトミ株式会社
発行日：2012年11月10日
禁無断転載

お問合せ先
フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
〒170-0001
東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内
TEL: 03-5961-5202
HP: http://festival-tokyo.jp/